

大崎つ子はぐくみ事業



路行かざれば 至らず
事為さざれば 成らず

吉野作造

おおさきの先人

大崎市教育委員会
吉野作造記念館
大崎市立古川中学校

東日本大震災から、まもなく三年になろうとしています。

昨夏、吉野作造記念館で古川中学校の〇一実施した際、副館長大川真氏の講話を聴き、余り知られていない吉野作造の業績に、私たちは大変感銘を受けました。それは、関東大震災後に、被災者の自立に向けた吉野の業績の数々でした。その後、このことにつけて、東日本大震災の復興と重ね合わせ、吉野作造の業績を道徳の時間で使う教材にすることにいたしました。そして、平成二十五年十一月二十九日にこの教材を使つた「志教育」自主公開研究会を開催し好評を得ました。実践成果と評価を踏まえ、「大崎つ子はぐくみ事業」として、大崎市教育委員会、吉野作造記念館とともに編集委員会を立ち上げ、県下に広く志教育に活用できる内容として手直しをしてきました。

ここに、吉野作造の生き方に触れ渴望できる教材「おおさきの先人『吉野作造』」として、刊行するに至りました。各学校におかれましては、この教材を道徳、社会科等で活用していただければ幸いです。

路行かざれば 至らず 事為さざれば 成らず

さらに、県内各地には確固たる信念のもと、志をもち、世のため人のために尽くした優れた先人たちがたくさんおります。こうした先人たちを発掘し、教材化され、みやぎの子どもたちの志教育に活用される一助になりますことを祈念いたします。

平成二十六年八月

おおさきの先人「吉野作造」編集委員会委員長 千葉 繁美

—自分たちの生活は自分たちで

今日は作造さんのことを皆に話したいんだ。

作造さんは、大崎市の古川で生まれたんだよ。十日町、昔は志田郡大柿村と言つたが、で生まれた。そして、古川尋常小学校（今の古川第一小学校）で学んだのさ。一八九〇年ごろのことだ。ちようどこの頃日本は、盛んにヨーロッパの文化を取り入れようとしている時だつたんだ。

作造さんはね、この小学校時代には英語塾に通い、英語を勉強し始めたんだよ。大変よく勉強のできる少年だった。

中学は、宮城県尋常中学校（今の仙台第一高等学校）に通つた。その時の校長先生大槻文彦には、大変目をかけられ、「養子にならないか」とまで言われるほど将来を期待されたんだ。

大槻文彦と言えば、十七年間の歳月と自分の人生を懸けて、日本初の国語辞典『言海』を作つた偉人だよ。そんな人に目をかけられるつていうのは、よっぽど、抜きん出たものを持っていたんだろうね。



そして十九才の時には、第二高等学校（今の東北大学）に入学するんだが、ここで、"キリスト教"との出会いがあるのさ。

作造さんはもともと温厚で優しい人だつたが、この宗教との出会いによつて、「信念を貫く強さ」も手に入れたんだよ。

二十二才で東京帝国大学法科大学に入学。一九〇九年に東京帝国大学法科大学助教授になると、欧米に渡り、三年の間、意欲的にヨーロッパ各地を見て回つたんだ。

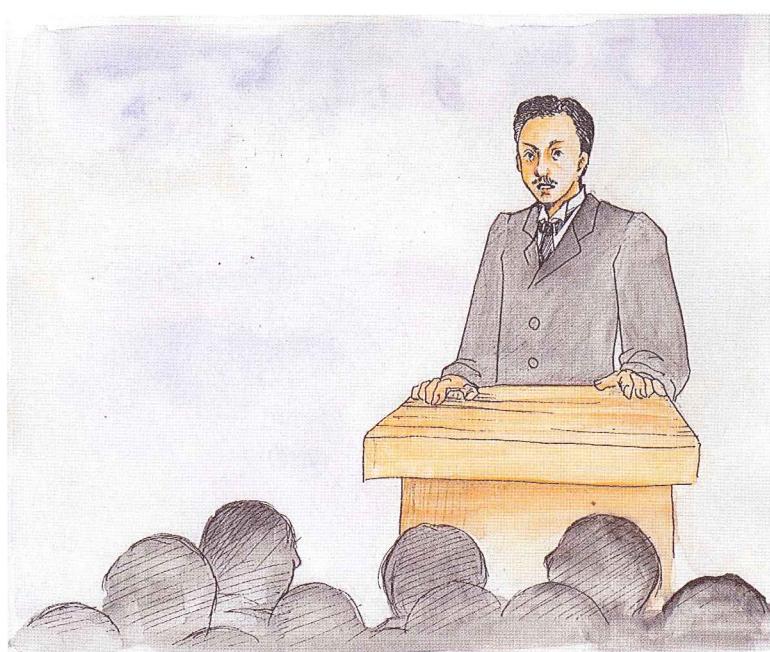
そして、机の上だけの学問ではなく、自分の目で見て「生きた政治学」を吸收するんだよ。

中でもヨーロッパでは、「民衆の力」が大きな影響力をもつて政治を動かしていくことに感動するんだ。
これらの学びから、作造さんは、「民本主義」（現在の民主主義のもと）を唱えるのさ。「政治は民衆のために行うものであり、民衆自身が政治に参加することが大事だ」という考えを、作造さんは日本で初めて唱えた人なんだよ！

この「民本主義」の考えは作造さんの仲間たちが「黎明会」などによつて広めていくんだ。

そうして一九二五年、一定の税金を払つている人しか持つことのできなかつた「選挙権」を、二十五才以上の男子すべてが、初めて持てるようになつたんだ！

作造さんが、ずっと主張してきたことが初めて実現されたんだよ。



二 震災からの復興、そして自立

もう一つ、聞いてほしいんだ。

それはね、一九二三年九月一日に起きた、「関東大震災」、死者十万人以上という点では、私たちが体験した三・一一以上の大災害だつたんだが、その大災害の直後に、作造さんが何をしたか、つてことなんだ。

体験したことのない大きな揺れ、倒壊する建物。でも、何より怖かったのは、火事だつた。十万人の内の多くが、熱風や火に焼かれて亡くなつたんだよ。

そんな地獄絵図を見るような状況の中、「朝鮮の人々が襲つて来る」とか、「朝鮮の人々が川に毒を流している」などというデマが流れたのさ。

一部の日本人は、あろうことか、朝鮮の人々を見つけると暴行を加えたり、虐殺をしてしまうこともあつたんだ。

その時、作造さんは大変厳しい口調で、日本人に冷静な反省を促したんだ。

「このような事は、世界の舞台に顔向けできぬ大恥辱だいちじょくではあるまいか」とね。



さて、焼け野原になつた東京で、作造さんは事業家として、奮闘を始める。

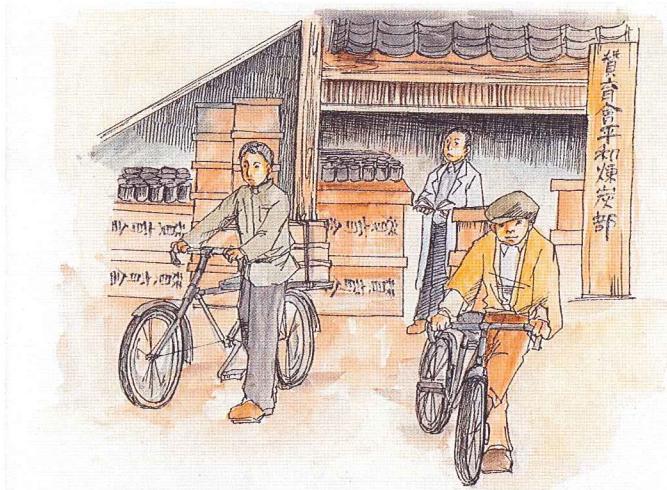
震災前から、キリスト教団体「Y M C A」を母体として、「贊育会」という組織を立ち上げていたんだが、その贊育会で医師らと共に病院の運営に力を入れたんだ。何故なら、母親たちに、健康で健全な子どもを育てるための知識が不足していれば、子どもはまともに育たないと心配したからなんだ。母子の健康が、「復興」には大切だと訴えたんだよ。

さらに、震災後には、被災者が住む場所を用意して「平和村」という村を作つた。そこで被災者の自立を助けていくために、セルロイドのおもちゃを作り事業を始めさせたり、練炭を作つたり、練炭ストーブを作ろうとしたり・・・。この事業に携わる中で、自立できた人たちもいたんだ。作造さんは被災者の人達が、自ら仕事を行い、経済的にも自立することが「真の復興」だと考え、支援し続けたんだよ。

さあ、僕は今日、作造さんことを君達に知つてほしくて話してきたけれど、君たちはどんなことを感じたり考えたりしただろうか？

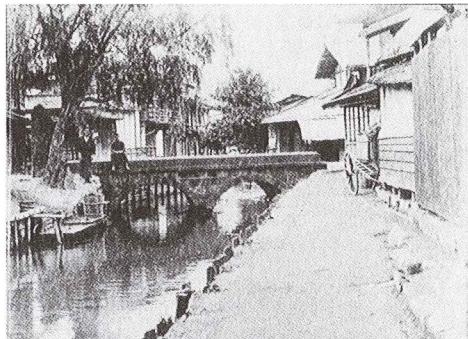
『常に正しきを求めて、向上的態度を持つ』
作造さんが残したこの問いかけは、どんな意味だと思う？

皆で考えてみてほしい。



第一章 いくつもの出会い

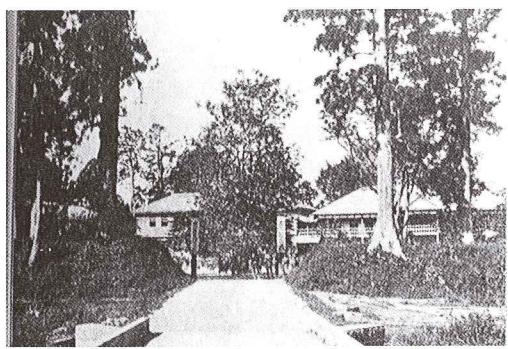
吉野は、1878（明治11）年、宮城県志田郡大柿村（今の大崎市古川十日町）に綿屋を営む父・年蔵、母・こうの長男として生まれました。父は綿屋を営む傍ら新聞も扱う文化的な人でもありました。その父・年蔵は旧古川町の4代目・町長を務めた人であります。



緒絶橋（大正4年）

佐々木一郎氏提供

吉野は1884（明治17）年、古川尋常小学校（今の古川第一小学校）に入学します。

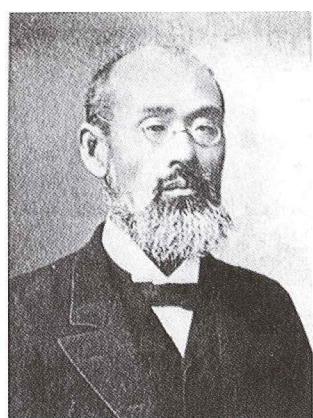


古川小学校（年不明）

この小学校時代はちょうど日本が盛んに進んだ西洋の文化を取り入れようとした時期でした。この風潮は古川にも及び、後に英語学校を建て『英和中辞典』を作った英語学者・齋藤秀三郎の塾で、吉野は英語を習ったといわれています。また、小学校の卒業前後に校長を務めた山内卯太郎のおかげで、吉野の作文力は大変向上しました。



中学生時代の吉野作造
『古川余影』所収



大槻文彦

『仙台一中・一高百年史』所収

大槻文彦といえば、日本初の国語辞典『言海』を作った人物です。

彼は、江戸時代の蘭学者・玄沢を祖父に、幕末に開国を指導した磐溪を父にもつ「大槻三賢人」の一人です。

文彦は、“独立した國の証”としての「国語辞典」を作ることを、自らの使命として、17年という歳月をかけ、『言海』を完成させたのです。吉野はそんな人物に将来を期待されたのです。

資料

1897（明治30）年、吉野は19才で、第二高等学校（今の東北大学）に入学しました。ここで、国文教授の佐々醒雪さっさせいせつに出会い、論文の書き方を叩きこまれました。そのおかげで吉野の文章は、分かりやすく論理的なものになっていきました。

そして、もう一つの出会いが、ミス・ブゼルとの出会いでした。尚絅女学院の校長であったミス・ブゼルを中心として、「聖書」の学習会が行われ、吉野は20才で洗礼せんれいを受けますが、この宗教との出会いは、吉野の人格の根幹こんかんを作っていくのです。



佐々醒雪先生を囲んで
吉野作造『講学餘談』所収



聖書研究会（バイブル・クラス）
栗原基『ブゼル先生伝』所収

1900（明治33）年、吉野は22才で、東京帝国大学法科大学（今の東京大学法学部）に入学、学問の吸収に努めます。そうした中で、ヨーロッパ留学から帰国したばかりの教授・小野塚喜平次の講義は、吉野に新鮮な驚きを与えました。

当時、東京帝国大学は“國家の官僚こっか かんりょう”を育てる場所であり、「政治は国家のための術」といった意識が強かった中で、「政治を国民生活と関連づけようとする」小野塚の姿勢は、画期的なものだったのです。

吉野の「民本主義」の主張は、小野塚の講義を基礎において形成されていくことになるのです。



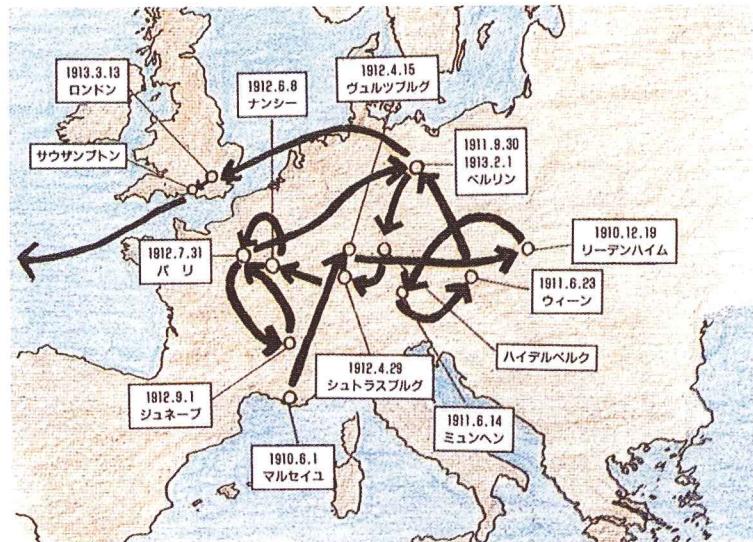
小野塚喜平次
吉野作造記念館提供

第二章 世界の視点

1909年（明治42）年、東京帝国大学法科大学助教授になった吉野は、政治学及び政治史の研究のために、3年間の欧米留学を命じられ、ヨーロッパへ出発しました。

最初は、ドイツのハイデルベルグ大学に、その後はヨーロッパ各地を回り、労働者のデモ行進や民族運動を間近に観察し、現実の政治から「生きた政治学」を学んでゆくのです。

ヨーロッパでは、政治に及ぼす民衆の力がいかに強いものであるか、そして政治家が宗教的・精神に基づく倫理に従っていることも知りました。



吉野作造の留学足跡地図

吉野作造記念館作成

このように吉野は大学で得られた政治学の理論を、欧米での滞在を通してより具体的に学び、その成果として、政治を論ずる場合、必ず「理論と実際とを埋めよう」と努力しました。

これが、日本に即した民主主義の形を考え出す、基本的な姿勢となったのです。

第三章 日本に“民主主義”を！

1913（大正2）年、吉野がアメリカ合衆国を回って欧米留学から帰国した次の年、1914（大正3）年に第一次世界大戦が始まりました。

ヨーロッパ全土を戦場として戦われたこの大戦争は、4年という長きにわたって、多くの人の生活や命を犠牲にしました。

ヨーロッパから帰国して間もない吉野は、この戦争に大きな関心を寄せ、行方を注視し続けました。

平和思想とは全くかけ離れた現実に、吉野は愕然とします。

そして、日本の政治の上には、平和思想を実現しなければと、固く誓うのです。

資料

当時の日本の政治は“少数の要人”が動かしており、参政権も、税金をたくさん払っている一部の人だけがもっているものでした。

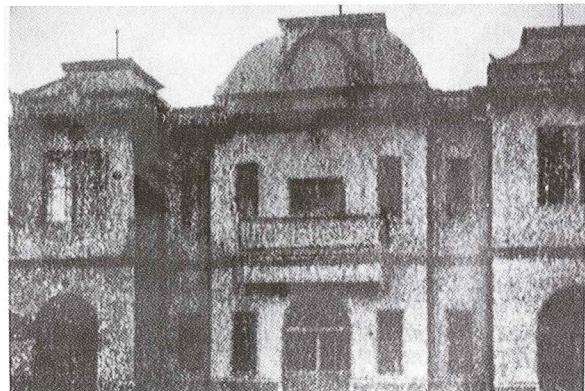
吉野は、政治も「国民一人一人の」意見や活動を重要視するべきだと考えていたのです。このように「政治は民衆のためにするものだ」という考え方を「民主主義」といって、吉野は、この提唱者として一躍有名になりました。

国民の意向を反映した“国民のための政治”，“議会政治”的必要性。

吉野は分かりやすい言葉で、丁寧に丁寧に民衆に訴えていきました。

その後、この「民主主義の考え方」は吉野を中心とした「黎明会」やその教え子たちによる「新人会」などによって、広がっていきます。

吉野の呼びかけによって、1925(大正 14)年、これまで裕福な人々しか持つことができなかった選挙権を、25歳以上の男子すべてが持てるようになったのです。



古川座（年不明）

1928年2月1日、初めての普通選挙が行われたが、吉野はここ古川座において、大観衆のもと、政治演説を行った。

資料提供：吉野作造記念館

おおさきの先人「吉野作造」

【編集委員】

○大崎市教育委員会	副参事	早坂 雅彦
○吉野作造記念館	学芸員	佐藤 弘幸
○古川中学校	校長	千葉 繁美 (編集委員長)
	教諭	奥山 輝子
	教諭	鈴木 陽大
○事務局 古川中学校	教頭	今野 克也

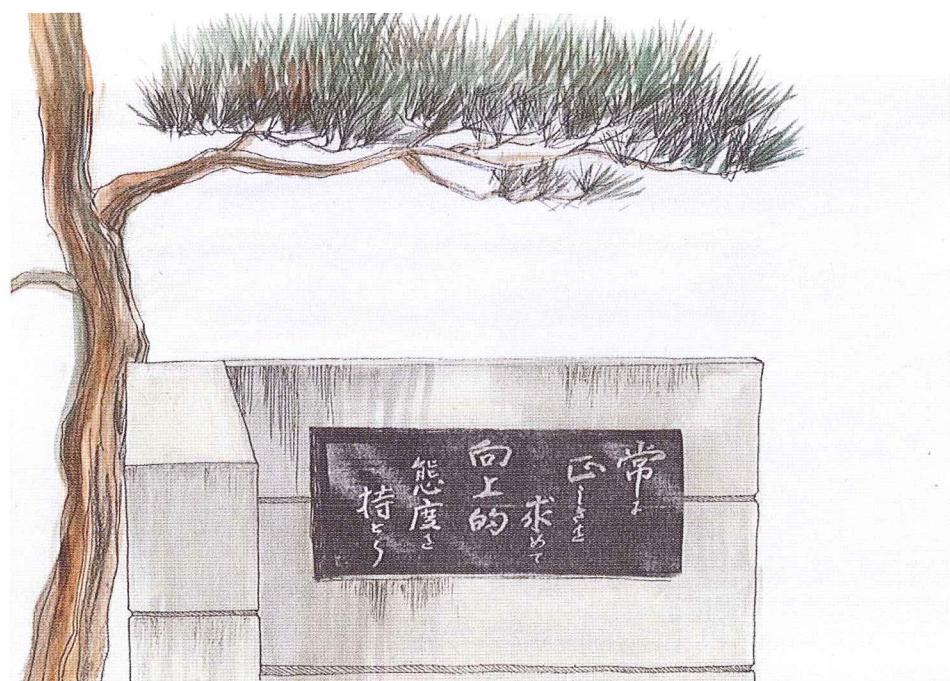
平成26年 2月 発行

装丁
イラスト

古川中学校
古川中学校

主幹教諭
教諭

清野 邦則
永井 絵美



常に正しきを求めて
向上的態度を持つ

「古川餘影」より